○天神橋より本道を上る十丁にして

○笋巖　宇曾旭學校の西、笋狀に簇立す

○妙見峰　笋巖の後背にあり妙見社を祀る

○瓊巖　妙見峰の南

○温泉　宇曾圓照寺の川向ひにあり、温度普通の浴湯より稍低し然れども一浴すれば肢體の融暢するを覺ゆるを以て一の浴場を設け火温を加へて里人の入浴に充つ、耶馬溪中又別に深瀨谿鳴良の温泉あるも未だ兩方とも試驗を經ざるを以て効驗の有無、疑問に屬す

○白石　又羊石と云ふ、耶馬溪八石の一、宇曾と藤の木の間梅が淵の下にあり、爛々遙に人の眼を射る、俗間傳へ云ふ是

往古彦山にありしもの洪水毎に流轉して今茲に止まる、此石轉々して末世中津の龍王海に達するとき、世界は萬古の泥海に復すと

淙々山澗水、中有爛々石、不隨牧羊兒、何伴飯牛客

村上先生臨澗居、枕鳥漱馮樂有餘　寄言石又須再拜

先生貞白石不知　廣瀨淡窓

○箭間巖　白石の上に聳立す、空窓あり口碑に云ふ、鎮西八郎爲朝、矢を宇曾より射たるとき、鏃此岩を貫通せり此東方の地名を篠矢と云へるは其岩を貫きたる矢の留まる處なりと

白石溪南嶺幾雙、參差若筍又如杠、何人一箭穿巖腹、痕跡依然石有窓　清王治本

○拱立巖　人の拱立するが如し、藤の木の内字日の本、朝陽橋頭にあり

君子相逢互敬崇、双岩拱手立橋東、應知造化非ㇾ爲ㇾ戲、
萬古傳來禮狀隆　清　王治本

○朝陽橋　守實、日の本の間にあり、橋上、彦の遠山、龍樹山、英山、杁立山、狩宿峰、宇治山等の諸峰巒を望み、しかも眼前に拱立巖の奇勝を供へ、橋下、山伏淵及長淵の鮮鱗の跳るあり

踏破豐山萬疊雲、一溪東去勝區分、朝陽橋上住ㇾ筇望、
玉箏森立高拔ㇾ峰　日下部鳴鶴

○英松及英姫の墓　守實の大歳神社境外にあり、英姫は彦山

神主の女なり彦山は元と兩部神道にして、常に山伏と神主の爭あり何の代なりけん爭ひ再發し　神主遂に亡び英姫僅に難を免れ山を降りて此村に隱る、英松は姫が手植せしものなり、と、又彦山の下藥峠の麓を落道と云へるは姫の落ち行きたる處なれば斯く名くると云ふ

○龍樹山の古刹陽雲寺　守實の南五丁の山上にあり、英姫の餘生を送りし處にして寺内其古蹟存す

○守實驛　は古宿驛地にて地勢稍打開きたる所なり今郵便局高等小學校、酒造家、雜貨店、旅人宿、人馬車あり、日田町へ四里十丁、柿坂三里三丁、彦山五里、猿飛二里

耶馬溪案内記

第八編

守實驛より彦山に至る

○守實より平小野の天滿宮　祇園社を過ぎ吉野の宮に至らんとするとき路右に

○霧石あり耶馬溪八石の一にして毎朝瑞霧を吐くと云へる靈石あり

○吉野の曲淵　怪嵓紆餘彎曲して溶漾の水を湛ふ

○鐘山　吉野の北方に聳ゆる高山を指す

○吉野峠及筑前峠は鐘山の麓にあり

◎弘法大師自刻の不動尊　は吉野の前、小屋川支谿、所小野と云へる地の絶奥、大將陣と稱する山脈の下にあり、層崖窄嶮なる窟中の堅壁に彫刻せり、窟内暗黑、火を點ぜざれば見るべからず、之を洞口より窺ふときは、兩眼煌々として射るが如し、其精工實に駭くべし、傍に鐘樓あり、享保十年關宗禪師と刻す、蓋し奥州人此所に留錫して建立せるものなり、吉野より約一里八合にして

◎念佛橋　草本、敎順寺前にあり、斷壁數十丈古樹蓊鬱の間危橋を架す、橋上より上流を望めば飛泉の懸るあり、玉瑩珠跳を見るが如し

危道双懸石崖頭、幽溪風度錦紋流、日生山下山南寺、
念佛橋頭別樣秋　田　進

秋翁念佛著橋名　危險度人無限情、催起白雲峰月志、
暗塵一破放光明　一止道人

○敎順寺

念佛橋頭山下寺、檐邊近峙巒三四、南方別有巨巖高、
幽邃自然多積翠　田　進

◎猿飛　耶馬溪三飛勝の一なり、念佛橋より、河畔を泝る三丁に當る窮崖の間、巖磐の瘻瘤、谿の兩側より相援れて起伏突兀せる所を谿水逆激研磨して、窈窕たる碧瑠璃の光澤を露出す、一瘤は一瘤より奇にして或は鵬騫の如く或は虎搏の如く

或は熊蹲の如く或は豕立の如し中に深淵あり一老樹其上に蟠屈す、淵頭又急湍を懸け縷々灑々、深淵に條落す蓋し此境は造物者奇を弄して極端に渉りし所と云ふべくして詩人も畫師も寫眞屋も未だ其眞相を世に紹介し得しものなしと

本谿の上流往々此所に類似の奇狀を現すもの多し、谿を泝るの客注目せられよ

青崖並立夾二流路一、別有中巖容似レ怒、聞說淡烟朗月宵、

田　進

石頭時見猿飛渡

○門の木山、杓子山、鷹山、扇峰、菅山の諸山敎順寺の背後に峙立す

○金坑　多良川附近に散在す、多く水車を以て之れが麓製をなせり、一ヶ年の產額殆ど十萬圓に達すと云ふ

◎鳴泉　草本尾曲の上流にあり此處に行んとするには先づ尾曲の上邊より道を左にとり篠竹叢樹の間を行くこと六七丁にして達す、怪木奇草鬱茂せる幽谷中、玲瓏たる岩石峭削して巧なるもの幻なるもの纖なるもの、麗なるもの、呀なるもの千形萬態、端倪すべからざる所、清泉高く懸り階段七級に激して條落するの樣、恰も花舞雪飄珠跳玉瑩の內に居るが如く又泉聲は嗚咽して乍ち大に、乍ち小に、磬の如く簫の如く、筑の如く絲絃の如く環珮の如く、音響林外に洩る、（注意）此上流に鳴泉に擬すべきものあれども小なり探勝者誤認する勿れ

○須磨の紅葉　尾曲の上端、路右に地藏堂あり、一老松、道を覆ふ處を過ぐれば左方より頭上に聳ゆる山あり須磨山と云ひ紅葉の名勝地なり、十三丁にして

○蛇淵　磵谷幽邃、淵上に停立すれば人の毛骨を寒慄せしむ十一丁にして

○柚の木　人家數戸槻木村の内に入り支道を右に見十五丁にして

○新貝　人家數戸同上　此處より右谿を後谷と云ひ槻木本村道の通ずる所なり六助墓まで二里二合、左谿を前谷と云ひ彦山まで二里半强、四丁にして

○明鹿野　槻木村役場所在地、小旅舍あり是より西北に茂り

て見ゆるは刈股山其右なるは、ツガオ山　十丁にして

○高内　人家あり是よりツガオ山を右にして刈股山の腰にかかるとき數十仞の下八間石と稱する奇石あり高内より藥師峠頂上まで約一里二合、滿壑の松柏紅楓は幾百年を經て藤蘿莓苔之を纏絡搖綴し、幽蔭蒼蔚して、晝猶闇く、懸泉處々に滴瀝して響を青林の下に傳へ、巖猿、聲を白雲の上に流す、此境に至らざるもの未だ

◎耶馬溪山の黛眉、紅葉、幽邃皆な談ずべからずと云ふべし

仙果園果仙

詣づべき道をし問へば白雲の上を指す彦の山がつ

◎籠水・彦山の東南麓、藥師峠の南にあり水上、市杵島媛命

を祀る、巖中唯水聲の響を聞きて水流を見ず、數十步の下邊洞穴中より滾々として湧出す是實に耶馬溪流の水源なり

○藥師峠　の頂上を下る四丁にして道分岐す、右油須原、左彦山、此處曾て藥師如來を安置し五六の坊舍あり依て峠に名づくと云ふ　十丁にして

◎彦山豐前坊社　今の高住社、亦豐前窟と云ふ、世に名高き岩見重太郎が劍法の秘術を受けし所なり（後に記する由緒を見よ）此處より直に絶頂なる本社に攀ぢ登るの峻路三十丁又直に彦山町まで三十丁、絶頂より彦山町まで一里二合、故に登山者は其日の時間と身體疲勞の度により其道を擇ぶべし

◎官幣中社英彦山神社　祭神と祭日

本社祭神　正哉吾勝々速日天忍骨尊

右岳　伊佐那支命

左岳　伊佐那美命

祭日　九月廿八日　御田祭陰暦二月十五日　神幸祭

同三月十四日十五日　秋祭同九月廿三日　神衣祭同

十月廿三日

◎彦山神社略由緒

大神の鎭り給ふ日子峰は筑紫第一の高嶽（海拔一千百七十米突）にして大古　皇祖第二世の神跡なり因て御鎭座の年號詳ならず、社傳舊記など案ずるに　神武天皇御東征の際に天押雲命を使して奉幣せさせ給ひ、又　崇神より、靈元に至

るの諸朝勅使を使して國家安寧の御祈願をせさせ給ひし事など一々數ふるに暇あらず故に古來公卿武將等は更にも云はず四民の崇敬甚だ厚きも素よりさる事にして御稜威顯然萬古四表に臨み給へり因に云ふ上古は日子山と稱せしを　嵯峨天皇の勅により彦の字に改め　靈元上皇の勅によりて更に英の字を加へしなり

○奉幣殿　（十八間四面、維新前大講堂と稱す）は官祭幣使參向、大小私祭、常祀、諸國代拜參候し又旱澇疫疾祈禱など執行す

○銅華表　（高二丈一尺七寸、廻り九尺五寸）は豐前豐後筑前三國信徒の寄附に係り九州第一の壯觀なり

○高住社　本社攝社の一にして維新前豐前坊社と稱し八天狗の一と云へり北方最極の窟を豐前窟と云ふ、上古高住宮と云ふ　天照大御神　天火明命　天火須勢理命　少彦名命鎮坐す靈驗日夜新にして或は山嶽を鳴動し或は巖壑を劈裂す、故に世人之を天狗倒と稱す、十丁餘北方に鷹栖山あり三神化して鷹となる一二三の鷹栖是なり靈鷹常に此山に住むといふ

○玉屋神社　（般若窟）世俗又鬼社と云ふ祭神、彦火瓊々杵尊猿田彦大神にして、當山三世の坐主、法蓮祈て如意珠を感得せし處なり窟の奥に靈池あり不濫不枯常に湛々として明鏡の如し若し不祥あらんとするときは必ず變相を現す故に行者、式日を以て之を相す若し變相あるときは三千の衆徒、山上に

達し一七日間祈禱するを例とす、栂尾高辨上人遙に靈池を尋ね來りて

いさぎよき彦の高根の池水にすます心をまたはにこさじ

と詠みければ、神の返しに

いさぎよき彦の高根の池水にすまは心のすまさらめやは

と玉葉集に出でたり

○材木石　本社と玉屋神社の間にあり形狀名の如し昔叡山西塔の僧常に山王に詣して彌勒尊を得んことを祈る一日神靈告て曰く汝彌勒尊を得んと欲せば鎮西彦山に材木石あり行て拜すべしと僧感喜に堪へず來て材木石を拜し神靈に一石を請て西塔に歸り堂を造り是を安置せしと云ふ

○八龍寺　は昔昌泰の始め命婦石川色子、唐人に筝を傳へし古跡なる事源氏物語に見えけるが今は草庵も絶え岩窟の中僅に不動の石像を殘すのみ、唐人姓は李氏、紹宜帝の皇子にして亂を避け海に航して此地に來る、皇子自ら耻ぢて名を云はず本朝十三絃の濫觴にして筑紫琴とは　宇多天皇の命じ給ひしものなり

又當山に左の名勝あり

○靈山谷　玉屋谷、別所谷、是を三谿と云ふ

○梵字巖　虛空巖、文珠巖、普賢巖、是を四巖と云ふ

○大南宮　法蓮堂、般若室、木練堂、開山堂、北山堂、增慶社、玉屋川、上佛來山、辨才天巖、材木石、鶯巖、裝束松、

圓通瀑、御供石、月輪池、花見岩、麻祓川、浮殿、報恩院、講堂、如法經堂趾、笈掛梅、御輿松、花月坐石、應永廿八年鐘、其他十二景八勝など稱して、月卿雲客の詩歌數ふべからず

賴山陽

彦山眞秀彦、馬耳迎二人面一、唯爲路高低、雙尖隱還見

廣瀨淡窓

彦山高處望氤氳、木末樓臺晴始分、日暮天壇人去盡、香煙散作二數峰雲一

釋豪潮

一睡青山頂　覺來言欲歸　枕邊明月落　足下白雲飛

村上佛山

法螺吹起一聲長　道士導我攀二羊腸一　上宮儼在最高頂　危欄縱眸睨八方　是山是水都不辨　四國九州青茫々　此時神氣自軒擧　欲下把二我詩一問中彼蒼上　高聲唱出兩三句　驚殺天狗天際翔　萬壑松杉忽震動　怪風捲雨奔更忙　須臾雨晴雲亦散　秋霜三千八百坊

○彦山町より里程　添田三里十七丁、油須原五里廿七丁、行橋十里、守實五里、柿坂八里、樋田十一里、中津十四里、槻木村木田又兵衞墓三里、津民村を經て、大屋敷六里半

耶馬溪案内記

第九編

彦山より槻木村及津民谷を經て大屋敷に至る

○彦山町より三十丁にして豐前坊烏居前に出て左折して少し下り岐路あり左をとるべし、對向を見渡せば三個の鷹栖山の尾に一岩あり笈の巖と云ふ又其次なる野山を

○柳峠　と云ひ豐前坊烏居前より十六七丁に當る此峠の凹所を越すものなれば是を目標として歩を進むべし而して

○伊良原の辻に出づ　官林の標木あり左京都郡道、右槻木道

是を十五丁下り又三四丁登り

○槻木村　人家十八九戸、一飲食店あり

○毛谷村六助墓　六助企救郡射鹿野にて微塵彈正を討ち後に加藤清正に仕へて木田孫兵衛と名を改め朝鮮へ渡りて軍功を顯はせしが遂に彼國にて討死す、故に里人之が奥墓を此處に建てたるものなり六助の事蹟は西國太平記彦山權現錄に詳なれば略す

○槻木の空洞に宿る　槻の木村の字は元、月の木にして六助祖佐竹某、有馬某なるものと主人三好入道宗閑に從ひ人煙杜絶の此深山に來り宿するに所なく遂に老大なる槻の木の内部腐朽せる空洞の内に入り一夜を明したるに時恰も八月十五夜

に當り玲瓏たる月光、空洞を照し、主從三人計らずも此内に月見せしよりやがて槻の木と名けしと云ふ又

○六助宇洞　甑岩、六助落しなど稱して六助籠居の事蹟あり槻の木より半里にして

○合使峠　此處昔、兩藩主の使者時々會見せしより峠に名づく、津民村河原口へ一里三合

○長岩城　津民村河原口にあり建久七年宇都宮宗房の二男伊勢守重房築きて子孫代々之に居り一夫守れば萬夫攻むるを得ずと云へる堅城なりしも天正十六年四月四日黒田家より攻め落され城主野中兵庫頭重兼自殺す

◎鷹巖　中尾峰、扇峰、宇洞巖、瀬戸巖は、河原口巖正寺前

に起伏併列して長岩城趾の山に連接す、其闢くものは門の如く、空しきものは室の如く障ふるものは屏の如く垂るゝものは簾の如し

◎落合飛泉　高さ約五間、田畔を下り瀧の下邊より見るを好しとす、宛然瑠璃絲の如し

◎柾木飛泉　落合より四五丁左谷に入る、岩盤滑かにして泉勢洒々灑々四段階となりて瀉下す、四周叢樹鬱生し深淵蒼々骨驚き、神懼るの感あり、然れども惜むらくは之を觀るの好位置なし觀賞の客は宜しく飛泉の上流を渉り向側を下り淵に臨める崖上よりすべし

◎耶馬溪を大觀するの好位置、津民村柾木谿より樋山路、羽

高草本に越ゆる山路即ち樋桶山の腰に至るときは凡そ溪中の名區盡く一眸に入り神氣軒昂當に愉絶快絶を叫ぶべし

柾木より大野、中畑を經て大野敷まで二里、大屋敷より柿坂十丁、口の林十丁

耶馬溪案内記

第十編

城井村福土支谿

○城戸瀧　第三編に記事あり、之れより十丁にして

○三尾毋臺　碧峰巉然として左右に起る、五丁にして

○馬臺城趾　此附近諸峰皆深秀にして蒼翠、沐するが如し、

三丁にして左谷に入れば

○蘆木山　連峰丹碧峭拔攅蹙し、矮松壽藤、相盤絡す、七八

丁にして

○苧川内の洞穴　深淵上の崖壁に五六の竇穴を現はす、一里にして

○檜原山　豐鐘善鳴錄に云ふ、釋正覺は越中の人天平勝寶四年の秋、關西に歷遊し豐前檜原山に至り其靈秀を瞻て此に卓居す恒に梵典を誦し靜かに道操をとる一夜夢に一老翁あり峨冠偉服、來て覺に告げて曰く我は是白山權現なり我此山に棲み汝を遲つこと尙し、汝宜しく一梵宮を建て以て圓極の宗を耀かすべし覺、悟て之を異しみ乃ち國司中納言行房に聞し工を鳩め經營數月にして成る扁して正平寺と云ふ爾れより釋風丕扇、衆坊蕃盛す覺は寶龜五年正月廿一日を以て遷神す覺曾て自刻する所の石像今猶ほ存す、境内に、下の池、岩屋、末

社坊中、坐主房、本社、御輿庫、行者道、行者窟、奥の院あり、當山は溪中有數の高山にして眺望絶佳の所とす、山頂より津民一里、口の林二里二合

耶馬溪案内記

第十一編

○耶馬溪名稱の起原

文政元年冬十二月頼山陽耶馬溪を觀て曰く嗚呼耶馬溪の山水凡一百里(今の十里)千巖競ひ秀で、叢樹鬱蔽し水は以て魚舸を泛ぶべく山は以て采樵に充つべし而して十有三村山を負ひ水に沿ひ田園離落、道路橋梁其間を點綴し、稼樵行旅の來往絡繹として絶へず仰て峰巒を望めば則ち巉岩天に攢り伏して溪潭を瞰めば則紺碧地に馳せ、崕、乳丹を吐き金氣霓を現は

す巖蘭桂て水芳しく翠苔稠くして石肥え佛閣神祠叢松の杪に起伏し野店驛舍深青の間に隱見す、加之山嶽の妙千狀萬態多多益變して更に端倪すべからず、蓋し造物者の活畫なりと、名して耶馬溪と云ふ、蓋本溪もと山國溪と稱し國音、耶馬と山と相通ずるを以てなり、又日本の異名を耶麻臺、野馬臺と云ひ、古昔吉備大臣支那にて讀み解きたりと云ふ、野馬臺詩（日本將來の豫言書「僞書」）の耶麻、野馬を耶馬に轉用せしものなりと

○賴山陽耶馬溪圖卷記

余嘗て昔人の畫を讀み其山貌の太だ奇峭なるを疑ふ恐らくは天壤間有る所に非ず、畫人一時興到て其筆墨を鼓舞するのみ

と、豐の耶馬溪を觀るに及んで、乃ち知る造物の奇怪、畫手も亦寫し到らざる者あるなりと、歲の戊寅鎭西に遊ばんとして海を過ぎ南彥山を雲際に望み、已に其異あるを覺ふ、既にして二肥薩隅を經、還て豐後の隈邑に寓し臘月五日豐前に入る、一水北來するに遇ふ、蓋し源を彥山に發するものなり、沿ふて東すること數十里昏黑左右の峰巒皆凡に非ざるを覺ゆ山溪相迫まる所は山腹を鑿て道を爲せり又牖を穿て明をとる余炬を買ひ以て入る、月溪水に在て朗然たるを窺ひ見て民家に宿す、翌大雨、霽を待ち乃ち發し、復た溪に沿ふて東すれば愈よ奇、群峰水を夾て攢竦し春筍の矗立するが如し土、石を載するもの石、土を挾むもの、全石なるもの、全石破裂して洞

穴を成すもの、兩石相鬪ひ其一仆れんと欲するもの、石數層累りて夏雲の狀を成すものあり、而して樹、石罅より横生、縱生、倒生して而して上指し、叢生して石を蔽ひ、石と勢を爭ひ而して之に勝たんと欲する如く、石又樹中に奮躍して而して出づ而して石蔭皆苔、紫綠相交はる、或は石の半面を沒し、或は全身を沒し、又樹を援けて石を攻むる者の如し、大抵峰勢石皺、董巨が刻意の圖の如し、時に窮冬、多くは老樹葉脫し、槎牙蒼古、皆倪黃の筆法、而して苔の枯蹙蒼渴せる者、王叔明なり、古人の筆墨吾を欺かず、柿坂に至り孤店に憩ふ、店、石壁の數丈なるに面し、飛泉懸る焉、仰げば則ち更に高峰あり、其幾十丈なるを知らず、余急に佩ぶる所の

酒瓢を釋き、命じて之を燖めしむ、竈突蕭然、會ま一獵師新に豪猪を獲たり、割て而して之を煮る、肪脆、水の如く、數大白を連引す、又行く溪又數曲、峰勢に隨て上下す、或は激雷噴雪、或は渟膏凝碧、峰勢之が爲め、或は碎け或は全く水を妬んで而して其影を亂すに似たり、屈智林に至る溪稍開け小村あり、一橋を過ぐ、此よりして溪北に行く、開くるもの益開け、十數里にして古城の正行寺に詣る、寺主含公は余が故人なり、余を待つこと既に久し、余先づ託して曰く、君が州の山水大に奇なり、含公曰く更に奇なるものあり、子をして之を目せしめんと、居ること二日含公と南行して田塍の間を行き、仙人巖に至る、巖石山上に突立す、含公指して余に

示す、余甚しくは賞せず、其明又田塍を經て、羅漢寺に至る寺、山に踞す、山を鑿て、洞壑橋梁の狀を作し、五百像を安んず、余復甚しくは賞せず、寺前の逆旅に宿し、燈を挑して而して談ず、余曰く山は水を得ざれば生動せず、石は樹を得ざれば、蒼潤ならず、余が馬溪を賞し而して仙巖を賞せざる所以なり、羅漢に至ては人工のみ、然かも皆馬溪の支裔なり矣、且つ馬溪は、溪山相迫り、田塍目を礙ざるなく而して其路、坦夷、眞に遊ぶべきなり、然れども二豐の、通道なる爲め、過ぐるもの慣看す、況や公等此土に生長す、其奇を覺へざるや宜なり、余は則ち再遊期すべからず、將に復之に溯り、以て之を諦觀せんとすと、含公袂を奮て偕に興にす、早、

發一水を過ぎ、北して馬溪の口に出づ、峰容樹色、忽ち迥かに別なるを覺ゆ、淺より深に入り、平より奇に入り、前きに數曲せしものに泝る、一曲は一曲より奇にして、諸を前遊に比するに、更に喜ぶべきなり、復絕壁の下なる孤店に至る、店主、余が面を識り、驚て曰く是前きに猪を喫せし客なり、何の幹、有て再び此に來るやと、余曰山を看んと欲するのみと、曰く山何の好看ある、吾子が看るを禁せざる也と、遂に溪畔に席し、含公と瓢を傾け、一醉して山寺に宿す、明、雨ふり、轎を借りて西還す、山峰雨を得て、皆變幻、態を作す或は前に以て一山と爲せしもの、分て數峰と爲り、群仙肩を駢べて其半身を露はし、萬松鬣を振ふて雲中に皷濤する如く

又廿五菩薩の樂を奏して、而して至るが如きなり、還て屈智林に至る、含公吾酒の盡るを慮り、豫め家童を戒め、樽を馬に馱して來る、醉を取て阿保村に宿し、翌寺に還り、又三日にして辭し去り、海を踰て東歸す、海雲の中より鎮西の山岳を顧望するに其豐前に屬するものは、皆別態あり、彦山其尤大なるもの、耶馬の山脈水理、蓋し皆彦山より發す、故に獨絶なるのみ、余足跡幾んど海内に半す、弱冠東遊して妙義山を得、以て無雙となす、今馬溪百里、妙義の如きもの其幾十峰なるを知らず、之を海内第一と謂も或は誣ひざるなり

己卯の臘、槖を肱く、時に山を寫す粉本數紙を得、戯に意を以て之を接續し、横長の一卷と爲し、又其由を記し併せて得

る所の詩九首を錄す、余詩文笨拙、其髣髴たることをも、狀するに足らず、況や畫に於けるをや、後の能者、董巨、倪黄の流の如きものありて、其境を蹋み、而して之を補成せば、此山水に負かざるに庶幾からん、而して此山水を目し、海内第一となせば、乃ち賴子成より始まる

圖、含公の取り去る所となる、備後の故友、橋元吉、亦山水を好む、爲に一本を寫されんことを請ふ、諾して而して未だ果さず、今茲に己丑、母を護して尾路に至る、留まること旬日乃ち前約を踐む、而して舊圖あらず、諸を胸臆に尋ね、冥搜默運すれば、山精水神或は來て吾を助くるを覺え遂に能く此を成す、指を屈すれば已に十二年矣、當時歸帆の外を憶へ

ば豐山依々相送るが如きもの今猶目中に在るなり

小野寺鳳谷

西遊日錄

日田投逆旅、廿一日爛晴晨發、二里踰一嶺、自此豐前二里、一村曰守實、乃耶馬溪、發源彥山、水聲淙然、清徹見底、渡溪一轉、三巨巖、對峙刺天、蒼苔斑駁、翠蔓搖綴、宛如拱立迎客、予命曰拱立巖、作一圖、自此每得佳境、一一作圖、名群峰記　石益恠水益奇、一勝如群仙遊戲、名群仙峰、得双巖矗立十丈直撐青霄、曰瓊樓巖、渡溪北顧、崖壁峭立、一洞通溪水聲激越、琤然可聽、曰珮環洞、抵柿坂、飛湍澎湃、石益峻、水益咽、奇峰巀嶭、古松橫生、如與石相抗者、遙望雲霞映發、詢

爲絕勝、曰飛動峰、東崖巉岩錯立、奇不可言、曰山陽再觀至此、日嘿不能去　乃投窟智林、呼酒助興、山影水色、恍覺在目、廿二日蓐食而發、見一崖窟狀、如盆石秀潤可玩、窟安大悲佛、流流環之、峭壁數十丈、麗迤曲折、老樹亂生、苔蘚濃沫、山色潭光、互相映發、穿壁下疊石、作溝通流、遠望如埤堤、而川水爲懸泉、宛如行屏障間、曰曲壁崖、崖盡巨石礎礎、架笹橋、狂瀾怒激、湍渴噴雪、曰噴雪橋、一翁乘筏下灘、迅疾如矢、操棹又妙、右折十數丁、双峯巉絕、抵羅漢寺、松杉交柯、仰不見天日、刻岩作磴、過數百級、有一險所、鑿坎受趾、躋石梁臨之如半月、一窟倚崖、崖腹置五

百佛像、據洞設樓門、過之則佛殿、怪壁下垂、如大鵬張翼、踞階下瞰山溪、恍然有仙山樓閣之想、取前路岸上奇峰嶙峋峭枝者、凡十三、如秋雲變幻、曰幻雲峰、路而窮、得洞門、凡五巖壁穿窓取明、最後一洞長七八十步、可騎過、洞盡碧波蹙岩、螭蜒爲蟠龍狀、曰享保年間出羽僧禪海所鑿、村驛曰樋田、巖巨突起、村家落々、倚巖而住、曰斧立、建宇佐廟時、取材于此云、至此山國稍解、眼界濶然、凡溪之勝七里十三村、呈秀献奇、皆天地神秀清淑之氣、凝結所成、抑亦洪水拆嶽洗肉存骨者也耶、山陽目爲天下絶奇、眞不誣也、寫爲十三圖、記概略、附圖後、未牌抵中津新濱、訪横井正卿、客歳新

會此地、塡海開田凡廿五丁、正卿開數頃、構一宅、西望連山、東臨蒼海、浮嵐暖翠、排闥而來、風色頗佳、正卿論經濟、娓々可聽、廿三日同正卿訪文學白石伯年、

耶馬溪絶句九首　　梁川星巖

從日田到中津、一路山水秀靈、賴子成嘗評爲無双、有耶馬溪山天下無之句、但其在荒僻、人多不知、而聞者亦不能深信、今日親自絶險究勝、方知子成之不欺、遂效顰成九絶句、恐未足髣髴一、終取嘲於山靈水神也

荒驛人家簇午煙、人家忽盡水潺溪、隔溪一望先明眼、

玉筍瑤簪森刺レ天
漸聞活々佩環鳴、翠蓋青旗透レ日明、赧愧書生寒乞面、
群仙抗レ手儼相迎
人遭二知己一死亦足　木偶良工爲二異材一、怪箇溪山帶矜色、
曾經名士品題來
石約二峰頭一山束レ溪、雲煙錯落樹低迷、畫人要レ闖黃家秘、
何不二齎レ糧到二鎭西一
山靈盤薄意區測、欲下出二變機一誇中與人上、青倒碧奔瀾不レ住、
峰々忽作亂柴鋏
溪山勢逼路杜絕、行客無レ緣相往還、巖腹鎖來通二一線一、
居然小有洞中天

日車紅閃曉風曲、樹々晴煙次第開　青壓二馬頭一驚欲レ倒、
萬峰飛舞自レ天來
雲吐霧呑峰出沒、故人曾說雨中奇、吾行遺恨君知否、
不レ見群龍隱躍時
曾讀黃溪諸勝記　恨無畫卷併傳レ之、異哉吾黨山陽子、
双筆能將一手持

耶馬溪　齋藤竹堂

攢巒疊嶂盡奇饒、造物應嫌レ着二一凡一、爭得雲梯三百丈、
乘風飛上萬巉巖
溪光玲瓏水亂唱、丹青有レ手寫難レ成、奇巖且欲二詩中絕一、
又恨傍人不レ知レ名

世間多少石峥嶸、果與二此溪一誰弟兄、今洞從前稱二最勝一、
恨無二一派水淙々一

從耶馬溪赴日田途上口占　田能村竹田

羅漢巖前日欲レ低、飛來峰外暮煙迷、今宵投宿知何處、
燈火依微古驛西

耶馬溪途上口占　原古處

石立泉奔盡不凡、奇非二靈擘一是神劃、南人始入雲山國、
先拜鷹巢第一巖

羅漢寺偶作　西秋谷

丹崖自着披二麻皴一、翠碧如レ描荷葉皴、堪レ笑大悲貪レ好景、
一巖奇所一分身

耶馬溪

宇都宮遠山

欲二將行硯寫一山容一、膚寸雲霑雨意濃、無二是岳神慳一勝景一、
溪煙忽抹最高峰

○末廣雲華の小傳　賴山陽の逸話

末廣雲華は、賴山陽の耶馬溪に、再遊するや、東導の任に當り、山陽をして、兢く耶馬溪圖卷之記を成さしめ、海内第一の山水たるを世に紹介せしめたるもの、然かも又天下の一偉人たるを以て之が小傳を記し、山陽の逸話に及ぶ

◎雲華名は　大含、別號を、鴻雪染香人、早作佛文中王之臣甲午講師と稱す、豐後國の滿德寺に生る、天才穎敏、風骨高邁、内外の諸學、皆其奥に臻る、正行寺の先住鳳嶺、夙に智

德を以て、世に著はる、雲華を目して法器となし、擧げて、寺職を嗣がしむ、既にして雲華出て、京都にあり、本山の學頭となる、身顯達に在りと雖然れども、榮利に淡なり、講讀の餘暇、花を蒔き石を洗ひ、烟霞に嘯吟し、最畫蘭に長ず、筆致洒然神采秀發、實に逸品たり、雲華素と田能村竹田と同郷なるを以て、友とし善し、京にあるに及び又賴三陽、篠崎小竹、貫名海屋等と相識り、詩酒徵逐、頗る相親しむ、又鑒古に精しきを以て、陶工木米、篆工林谷等に推重せらる、凡そ往來唱和する所は、皆海内の名士にして四方の韻人京師に入る毎に、必ず一たび雲華を見ざれば措かず、天下相推して風流の棟梁となす、雲華人となり白哲豐眉、軀幹偉大、儀容

神の如し之を望見するもの輙ち其常人にあらざるを知る、久留米藩主有馬侯、曾て技を苑に演ず、觀るもの堵の如し、雲華又徒弟と往て之を觀る、侯遙に雲華を雜沓中に認め、其風顔の凡に超ゆるを奇とし、之を延きて上座に置き遇するに大賓を以てす、時人之を榮とす、山陽、雲華の像に賛して云く

「喚如二海日之昇一春帆」爽如二峽嶺之度一曉松」と竹田又云く

「濯々如二白蓮出一綠波一烱々如二明月灑一秋蘋一」時に本山大に土木を起す、因て雲華をして四方に布化せしむ故に東奥西鎭北越南紀、盡く巡化せざるはなし、其至る所の士庶風靡す、上は侯伯より以て、儒雅隱逸の士に至り一見して心折れ、胥な稱して眞宗第一流の人と云ふ始め養父、鳳嶺、雲華の畫癖甚

しきに過ぎ其學問の前路を塞がん事を恐れ屢々之を極戒すと雖、雲華内自制する能はず、往々閑を偷て盆蘭と机上に相對し遂に畫蘭の妙を得、其名、德風と共に一世に高し是に於て辱くも、　仁孝帝の聞に達し、勅命本山に下りて其畫を献せしむ、命下るの日雲華乃ち筆を把り楚々落々立ろに十幅を作り幅毎に詩を題す、字體亦、逸岩雄偉、油然として墨氣紙上に躍る、搢紳諸公、之を觀て曰く往きに數々畫工に命じ、御覽畫を作らしむるに、渠れ大旨出づるを聞けば其意先つ縮み筆乃ち澁滯す、故に成るの後毫も活潑生動の氣なし、今此畫は平氣暢神運腕自在の間に成るを以て雲煙潚灑清秀掬すべく且其字、遒予高逸自ら道風懷素の氣象ありと果して大に天眷

に稱ふと云ふ、雲華天禀の才を以て釋典に該通し德八宗に振ひ望一世を覆ふ、祥僧豪湖亦其風采を慕ひ數々就きて悟言する所あり、水藩烈公の如き英明夙に尊攘を以て自任し謂らく佛亦夷狄の屬、之を排せざるべからずと、深く東湖が排佛の詩を愛せしが後雲華の江戸に至り東湖が賦を見て、其韻を次し之を駁して佛法の國家に益あるを賦するや、烈公痛く其才學に驚嘆し默然として亦一語なかりしと云ふ、而して山陽、竹田の如き一に雲華に因りて譽を博するを得たり故に二子之を敬すること極めて厚く、殊に山陽の如きは常に之を師兄視せり、始め山陽大阪にあり未だ世に著はれず、一日新街の妓樓に遊び流連去らず、囊底既に空缺す、樓主大に怒り罵詈嘲

笑之を責むること甚し、山陽則ち妓に命じて紙を展べ立ろに書十枚を作り、折柬を併せて之を雲華に贈らしむ時に雲華、難波の別院にありて、法を說く四周圍繞す、樓使馳て其坐下に至り實を以て告ぐ、雲華直に金三十錠を出し以て其書を購ふ衆皆愕然として問て曰く彼醉漢果して何者ぞと雲華曰く此れ天下第一の豪傑、山陽先生なりと、之より山陽の名始めて世に著はれ書を乞ふもの日に廣至するに至れりと、後曾て山陽外史を編し書中本願寺を呼びて、一向賊と稱す、雲華之を詰て曰く顯如法主未だ曾て朝廷に乖かず何を以て賊書するやと、山陽曰く之れ織田氏傳中の語なり若し法主の傳を作らば則ち信長を以て賊となすも亦可なりと、是に於て雲華も亦深

く之を責めずして止む、又曾て山陽眞宗の學頭、法海師の賢性を聞き、雲華の紹介を經て之に謁す、師山陽を見て叱して曰く汝三歳親を省みず、而して頃日楠公の傳を記すと、凡そ忠臣は必ず孝子の門に出づ、今不孝人の筆を以て忠臣を傳するも楠公豈之を喜ばんや予亦汝を見るを欲せずと、山陽大に愧ぢ退て其狀を雲華に告ぐ、雲華溫然として謂て曰く師素と陽明學を講す、故に此言あるのみと、山陽嘆じて曰く海公は夏日、上人は冬日の如しと、遂に翌旦を以て京を發し親を藝に省みしと云ふ、當時法海、雲華圓解各文事に長じ宗門の龍象となす、嘉永三年十月雲華病沒す、是を以て海內我豐を寓望し稱して文國となす、或は謂く眞宗の僧は眞宗學を事とす

れば則足れり寧そ必しも儒書を讀まんや況や詩賦固より風流に屬するをや恐らくは我道を傷ぶものあらんと雲華之を聞き弟子に告げて曰く高祖の和歌を善くする覺師の詩賦に巧なる豈嘗て我道を傷けんや先師鳳嶺亦詞藻を喜ぶも一宗の學宗たるを妨げず凡そ我宗風、擅に肉を食ひ妻を携へ其俗にあると毫も異なる所なし、故に漢學を勉め、風流を學び勉めて俗氣を脫し、以て其志を高尚にし道德を揚げざるべからず今や我宗の僧侶、或は學寮の上座にあり而して漢文に通ぜず和訓廻環始て僅に其義を解し甚しきは則通俗文章すら綴ることを得ざるものあり、夫文字を知らざること斯の如くなるを以て其講ずる所皆妄なり豈能一宗を揮揚するを得んや予を以て之

を視れば目下俗僧日に俗途に趨る、遂に世の識者をして眞宗の僧は皆愚を以て其姓となすべきの當れるを稱するに至らしむ嗚呼是誰の過ちぞやと、聞く者以て時俗僧侶の摧邪輪となす

天下第一の名勝 耶馬溪案内記 終

明治三十八年十月十五日印刷
明治三十八年十月三十日發行
明治卅九年十二月十五日第二版印刷發行

著作者兼發行者　果仙事　小川古吉
大分縣下毛郡東城井村百五番地

印刷者　吉見繁藏
東京市小石川區久堅町百八番地

定價參拾五錢

賣捌所

梅野書店
大分縣下毛郡中津町

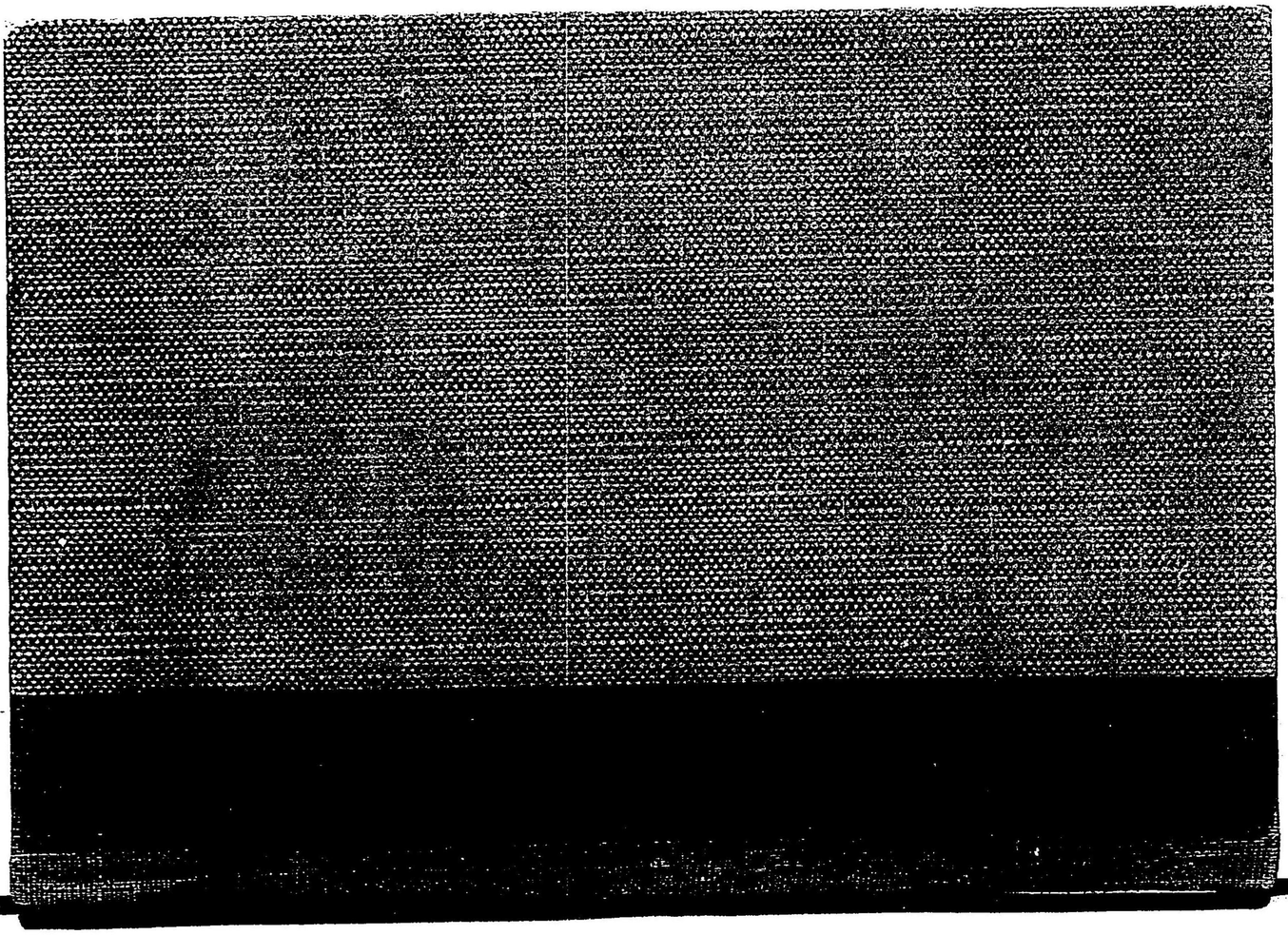
津依書店

熊谷耕雲堂
大分縣下毛郡東城井村大字樋田

（博文館印刷所印刷製本）

著作權登錄

Ⓧ94
472



94
472

026343－000－1

94－472

耶馬渓案内記（天下第一の名勝）

仙果園主人（小川　古吉）／著

M39

ADC－4129

25.11.28